■研究十二月往来〈176〉

式三番という名称の初出

天野文雄

「式三番」（シキサンバン）はもちろん《翁》のことであるが、現代ではそう頻繁に使われる名称ではなくなっている。本日のこの初会の番組も「翁」と記されているが、現代では番組の表記はこれに定着しているようである。ただし、これは近年にはじまったことではない。豊富に残る江戸時代の番組の表記がほとんど「翁」なのであり、現在の番組もそうした伝統を継承しているわけなのである。もっとも、近世においては番組こそ「翁」が圧倒的だったが、《翁》の文句は「式三番」と呼ばれるのが普通だった。そのことは江戸時代に刊行された《翁》の文句がいずれも「式三番」と呼ばれていることに端的に示されている。しかし、この《翁》の文句の名称としての「式三番」も、文化十年（一八一三）の浅野栄足著『翁舞神歌考』あたりから「神歌」（シンカ・カミウタ）とも呼ばれるようになって、現在では観世流や金剛流では「神歌」（カミウタ）と呼ばれている。宝生・金春・喜多の現在の呼称は「翁」だから、現在は《翁》の文句の名称としても「式三番」は使われていないことになる。

このように、現在ではまことに影のうすい「式三番」だが、この「式三番」は室町時代までは《翁》の呼称の主流だった。室町時代以前の《翁》は「式三番」のほかには、主役の翁で代表させて「翁面（おもなめん）」と呼ばれたり、春日若宮祭の大宮神前での《翁》がその由来によって「呪師走り（しゅしばし）」と呼ばれたり、金春禅竹などは「翁式三番」とも呼んでいたりするが、《翁》の呼称としては「式三番」がもっとも一般的であった。世阿弥も『風姿花伝』や『申楽談儀』で《翁》をもっぱら「式三番」と呼んでいる。

この「式三番」は《翁》に登場する（登場していた）〔翁・三番叟・父尉（ちちのじょう）〕の三翁に由来する名称と思われ、たんに一般的というだけでなく、少なくとも鎌倉後期以前の《翁》の構成に即した由緒ある名称と思われるのだが、これまでのところ、意外なことに世阿弥より以前の確実な用例に恵まれていない。小著『翁猿楽研究』（平成七年。和泉書院）ではとくにこの点については言及していないが、立場としては、世阿弥のものがその確実な用例の初出という定説（日本思想大系『世阿弥禅竹』など）に従っていた。しかし、その信憑性には問題はあるが、世阿弥以前にも「式三番」の用例は存在している。以前から気にはしていたことでもあるので、ここで改めてそれ（二例ある）が世阿弥以前の「式三番」の用例かどうかを検討してみることにする。

最初に取り上げるのは、南北朝期に編纂された法隆寺の年中行事次第たる『寺要日記』（一冊）である。同書は法隆寺における諸行事の次第を一月から十二月まで月ごとに整理したもので、現存本は延文四年（一三五九）～貞治五年（一三六六）の転写本であるが、その八月二十三日の御霊会の記事中に、

次田楽　庭立等如常。
次猿楽　式三番等如常。
次相撲　十番如常。

とあり、次いでその少しあとに、

一、御還御事。猿楽式三番畢者、

急御還御成奉。

とある。

『寺要日記』のこの記事は二例とも能勢朝次氏の『能楽源流考』（「法隆寺関係の猿楽」）に引用されていて、研究者には周知のものだが、これによれば南北朝期の「式三番」の用例がここに見出されることになるわけである。筆者がいままでこの記事をそう考えなかったのは、昭和五十九年と六十年に影印版で刊行された法隆寺史料集成（巻六、七）の『寺要日記』の解説（高田良信氏）に、書写は南北朝だが応永以降の記事も交じっているとされていたことが脳裏にあったためである。しかし、このたび改めて影印版の『寺要日記』を繙いてみると、確かに応永以降の記事が貼紙や書き込みの形で記されているが、右の「式三番」の部分はあとから書き込まれたものではないことが明らかであった。この部分は十月の記事の末尾にある貞治五年の書写識語と同筆でもあり、この「式三番」は確実に貞治五年（一三六六年）以前の用例ということになる。

もう一つは『太平記』巻二十三の「大森彦七事」のなかにみえる用例である。大森彦七は『太平記』のこの話にしかみえない人物で、それによれば湊川の合戦で活躍して楠正成を切腹させた伊予の武将だという。その恩賞として将軍尊氏から数箇所の所領を与えられた彦七が、その祝いに素人猿楽を催して楽しもうとすると、正成の怨霊が彦七の所持している名刀を奪おうとして襲ってくる。美女に化して現れた最初の怨霊を退散させたあと、また猿楽を催すと、ふたたび黒雲に乗った怨霊が現れ、またもや猿楽は中断してしまう。そのあとも、いろいろな怪異が出来するので、大般若経の真読を行って、ようやく怨霊を退散させる、という物語である。この「猿楽」は能のことで、この話では彦七自身も演能に参加することになっている。実話ではないものの南北朝期の能の人気を伝える点でも興味深い物語だが、問題の「式三番」は正成の怨霊の二度目の襲来のあとの叙述に、

また今夜の猿楽も式三番にてやみにけり。

とみえている。ただし、右は『太平記』の古態本の本文（巻二十四）で、流布本ではここは、

また今夜の猿楽も二三番にてやめにけり。

となっているのである。

さて、この二種の本文のいずれが原態なのかであるが、常識的には古態本の本文をそれとすべきだろう。とすれば、ここにもう一つ世阿弥以前の「式三番」の用例が加わることになるのだが、しかしながら、ここは流布本の「二三番」が正しいように思われる。というのは、この二度目の怨霊の来襲の時は、古態本も流布本も、「件の堂の前に舞台を敷き、桟敷をうち並べて、見物の輩群をなし」て、「猿楽すでに半ばなりける時」だったとされているからである。この「半ば」は〝一番の半ば〟ではなく、〝催し全体の半ば〟と解するのが自然であり、これとの関係でみると、「二三番」のほうが自然なのである。受領を祝って催された素人能という設定を考えても、そこで《翁》が上演される可能性は低いと言うべきだろう。古態本の「式三番」は、本来「弐三番」だったものが、「弐」→「式」と誤写されたものかと思う。

かくして、現時点では『寺要日記』の「式三番」が確実に世阿弥以前の用例ということになる。これによって、すくなくとも「式三番」が世阿弥の造語である可能性は消えたことになるが、それにしてももう少し世阿弥より古い時代の用例が出てこないものだろうか。

（大阪大学文学部教授）